

好意はあったが、それをあくまで守られるとは必ずしも期待出来なかった。私はいつも思う。とに角先生は外柔内剛の典型的な一人ではなかったかと。

もう一つ言い落したと思われるものがある。先生は気象学一般（気象器械も含めて）に通曉されたばかりでなく、専門以外の地震学、海洋学にも明かだった事でそれは驚くばかりで、一方御門違いの建築についても一つの主張があり、当時の文部省技師の作った建物とは様式において非常に異なるものが、先生在職中の建物にある。例えば神戸の海洋気象台、柿岡の地磁気観測所、布佐の

気象通信所等の構造物はその一例である。元より、これは先生の趣味だけでは説明出来ないもので、昔の文部省の役人に対して、自分の設計を貫き通す頑固の気質が物を言っていると思う。

口絵「古い写真」

こゝに掲げる古い写真は知人よりの賜物で中にその知人の親父も入っている。この画中に岡田先生が居るといふので、こゝに出させて貰ったのだが私には分らない。然し先生の常に尊敬していた北尾次郎先生が居ることだけは確かである。

気象集誌投稿および編集規定の一部改訂

気象集誌の投稿編集規定の一部を下記ゴチック活字で示したように改訂しますからまちがいないようお願います。

“3. 論文・要報 気象集誌には原則として会員の寄稿による論文、要報、論文概要および学界記事、消息その他をのせる”。

“7. ページ制限 論文は簡潔にわかりよく書くこと。原則として論文の長さは図を含め印刷ページで16ページ以内とする。ただし内容によっては例外を認めることもある。要報の長さは印刷ページ4ページ以内とする”。

“8. 7) ヘッディング（ページ上欄の省略題名）および国際十進分類法（U. D. C.）は指定する”。

なお、7. ページ制限の項の中にありました論文の印刷ページ「超過分については1ページあたり1500円の印

刷費を投稿者が負担する”という枠をはずすことになりましたが、“論文を簡潔にわかりよく書くこと”という制限はそのまま生きております。ただ十分簡潔に書いても印刷で16ページを越す論文については掲載をおことわりすることなく極力印刷できるようにしたいという精神でありますから、意のあるところを御了承の上ふって投稿方をお願いします。

国際十進分類法（U. D. C.）については投稿者で指定されるのが望ましいのですが、手もとに資料がないため指定がむづかしい方は編集で指定します。ヘッディングの方は著者が指定されるよう希望します。

また論文概要（アブストラクト）をのせるようにしますから他の学術雑誌に発表された“気象学およびこれに関連する分野の学術論文”のアブストラクトをおよせください。

〔雲鏡〕 雲の呼びかた

気象用語審議の報告があり、「巻雲」は「カンウン」と呼ぶべきだというようなことがあげられたそうである。考えてみると、巻雲とか積雲、層雲などと一般にはなじみのない呼び名ではあるまいか。

雲の呼び名はこの際、学術用語と、一般に使われることばに分け、学術用語には学名を、また一般に使われるものには、今まで俗語と考えられていたものを使ったらどうか。

気象技術者や、気象学者には、cirrus. stratus. cumulus. といえ、だれにでも通じるようになりたく、Cu-humilis. Cu-congestus. Cb-calvus. Cb-capillatus. の区別がわかるように再教育してもらいたいものである。現在、わたくしは予報課の現業に勤務しているが、予報当番の人が「積乳雲の頭がこうなったやつ」と手ま

ねをするとか、「CKが出ていたから、明日の天気は…」などと検討されるのはどうかと思う。

お医者さん——看護婦さんまでも——は、現に学名を使っているらしく、われわれ門外漢にはさっぱりわからない。わからないといって別に困らない。生物をやっている人達も学名である。

つぎに、一般の通用語であるが、古来から、うすぐも、はれぐも、きりぐもなどがある。無理して「カンウン」などを押しつけられることもあるまい。今まで学者は、通俗語を使うと権威が無くなるとも思うのか、あまり使いたがらないように思われる。ひつじぐも、さぼぐも、あめ（ま）ぐも、ゆきぐも、かみなりぐもなどと使ったほうが、よっぽどわかりやすいと思うがどうだろう。ついでに、動植物の名はかな書になっているように、雲の名もかな書にしたい。

（広島地方気象台 吉持 昭）